

＜令和8(2026)年産いちご主要病害虫の発生経過＞

育苗期は、炭疽病がやや多い～多い発生でしたが、全体的に病害虫が少ない～平年並で推移しました。本ぼにおいては、秋口の高温と少雨により、ハスモンヨトウの発生が多く確認されました。また春先は、平年より気温が高く降水量が多かったことから、灰色かび病とうどんこ病の発生が多くなりました。

1 炭疽病

＜発生状況＞

9～10月及び3～4月はやや多い発生で推移しましたが、全般的には平年並の発生となりました。

＜防除対策＞

伝染を予防するため、かん水は水の跳ね返りのない方法で行いましょう。発生前から予防的に薬剤を散布することが重要です。発病株はほ場内外に放置せず、ポリ袋などで密封して嫌氣的発酵処理を行い、適切に処分しましょう。

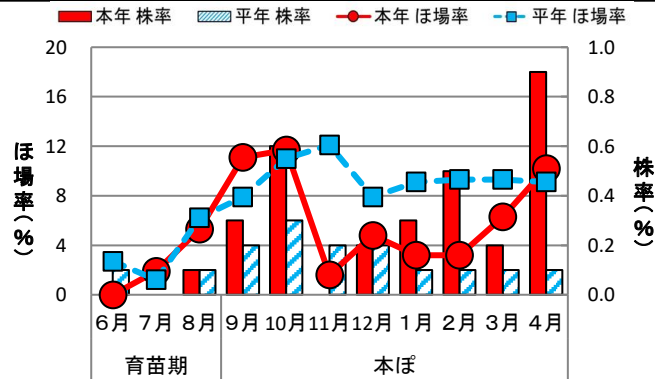


図1 炭疽病の発生ほ場率・株率

2 萎黄病

＜発生状況＞

8月と12月に多めの発生が見られましたが全体的に平年より少ない発生でした。

＜防除対策＞

病原菌は土壤中で5年以上生存するため、本ぼで発生が確認されたほ場では土壤消毒を適切に行いましょう。

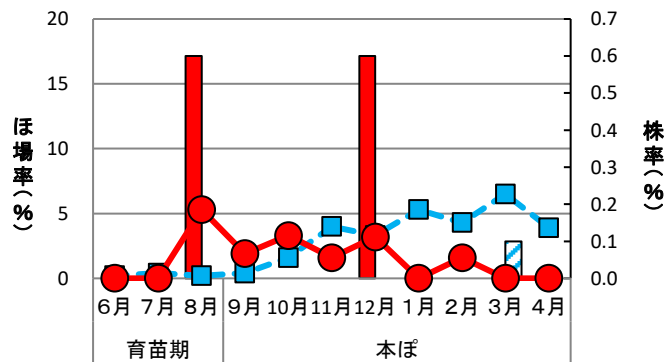


図2 萎黄病の発生ほ場率・株率

3 灰色かび病

＜発生状況＞

全体的に少ない発生でしたが、1月と4月には発生が多くなりました。

＜防除対策＞

多湿条件において発生しやすいので、ハウス内が多湿にならないよう、かん水量や換気に注意するとともに、薬剤を丁寧に散布しましょう。

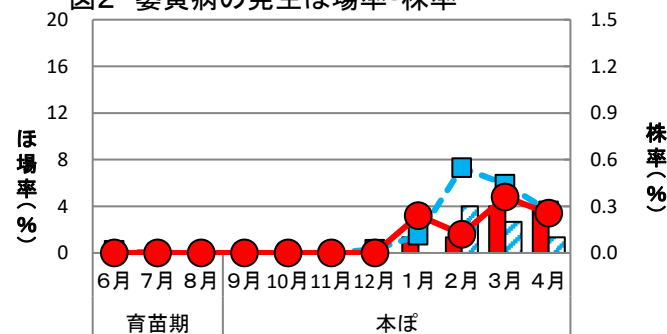


図3 灰色かび病の発生ほ場率・株率

4 うどんこ病

＜発生状況＞

全体的にやや多の発生でした。特に育苗初期の6月、生育後半4月の発生が多くなりました。

＜防除対策＞

育苗期の防除を徹底し、本ぼに病原菌を持ち込まないようにしましょう。

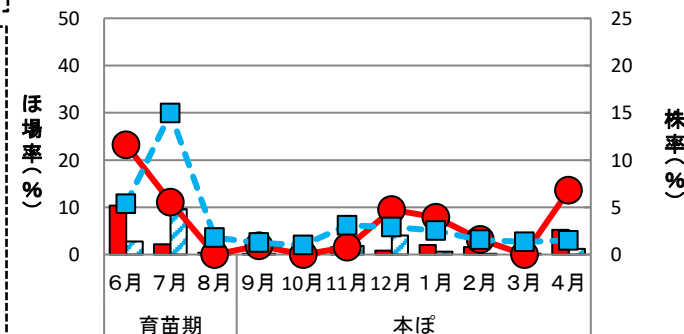


図4 うどんこ病の発生ほ場率・株率

5 ハダニ類

<発生状況>

育苗期から本ぼの栽培期間を通して発生が見られましたが、全体的に平年並～やや多の発生でした。

<防除対策>

早期発見・早期防除に努め、天敵製剤（カブリダニ類）を使用する場合は、ハダニ類の発生前に放飼しましょう。

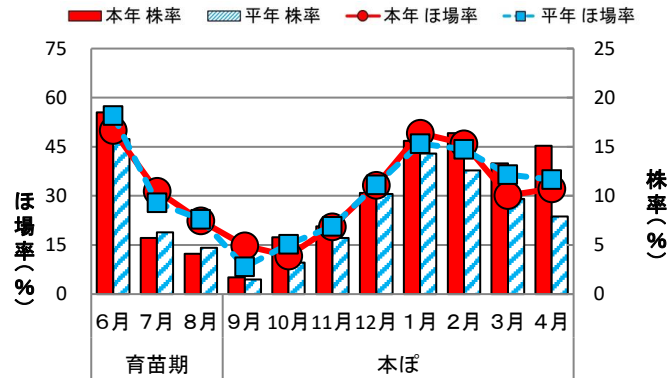


図5 ハダニ類の発生ほ場率・株率

6 ハスモンヨトウ

<発生状況>

8～10月に発生が多くなりました。

<防除対策>

幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、早期発見・早期防除に努めましょう。また、若齢幼虫が集団でいるうちに葉ごと摘み取り、処分しましょう。

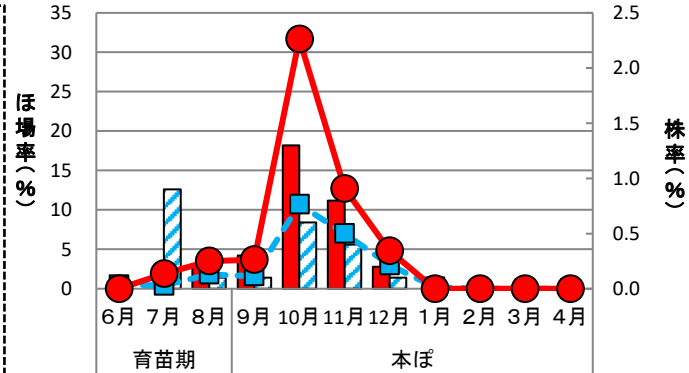


図6 ハスモンヨトウの発生ほ場率・株率

7 アブラムシ類

<発生状況>

育苗期から本ぼの栽培期間を通して発生が見られました。全体的にやや少～平年並の発生で推移しました。

<防除対策>

早期発見・早期防除に努めるとともに、葉裏にも薬剤がよくかかるよう丁寧な薬剤散布を心がけましょう。

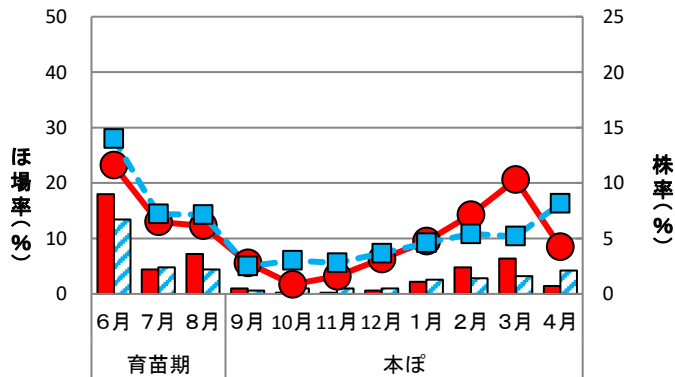


図7 アブラムシ類の発生ほ場率・株率

8 アザミウマ類

<発生状況>

11月から発生が確認され、生育後半にやや多い発生でした。

<防除対策>

開花初期にハウス外から侵入したアザミウマが多いと春先の発生につながることから、秋の防除を徹底しましょう。春期の飛び込みがあるので、適切に防除しましょう。

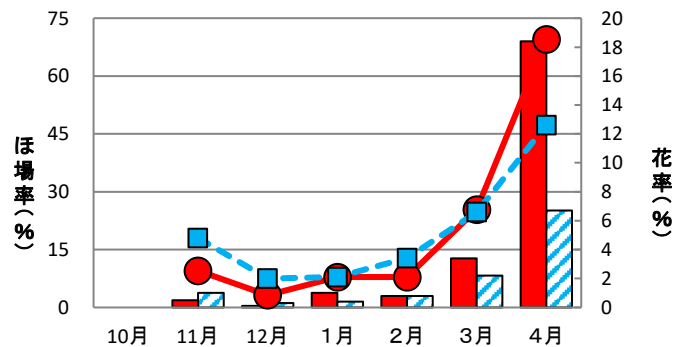


図8 アザミウマ類の発生ほ場率・花率

育苗期間中に病害虫防除を徹底し、本ぼへの持込みを防止しましょう。

■ 今月の防除ポイント

親株と本ぼの管理作業が重なる時期は、病害虫の持ち込みを防ぐために作業順序へ細心の注意が必要です。本ぼで発生した病害虫を親株へ移さないよう、必ず親株から先に作業を行いましょう。親株で病害虫を確認した場合は速やかに防除し、苗や次作の本ぼへの持ち込みを防止しましょう。

ー 炭疽病対策のポイント ー

親株での発生は、被害が大きくなるため、防除対策を徹底しましょう。

1. 発生時期

発生は主に6月下旬～9月下旬で、特に高温期に多発します。気温が高い時期は発生リスクが上がるため、注意深く観察しましょう。

2. 栽培管理

雨よけ栽培を基本とし、かん水は点滴チューブなどを用いて、水の跳ね返りが起きない方法で行いましょう。葉や株元が濡れる環境は発病を助長します。

3. 予防散布の徹底

症状が出てからの防除は難しいため、発生前から定期的に予防散布を行うことが効果的です。

4. 発病株の処理

発病株は見つけ次第速やかに抜き取り、肥料袋などに入れて空気を抜き、口をしっかりと閉じます。日当たりのよい屋外に置き、嫌氣的発酵処理を十分に行ったうえで適切に処分しましょう。



ー ハダニ類防除のポイント ー

気温の上昇で発生が多くなる時期です！発生を認めたら防除を行いましょう！

1. 作業順序の徹底

本ぼで薬剤抵抗性が発達したハダニ類を親株へ持ち込まないように、本ぼ作業の後に親株の管理作業を行わないようにしましょう。

2. 育苗期の薬剤散布

育苗期には、収穫前使用日数の長いトクチオン乳剤（I：1B、収穫75日前まで）、アグリメック（I：6、親株育成期・育苗期に使用可）などを効果的に組み合わせて使用し、初期の発生を抑えましょう。

3. 気門封鎖剤・天敵製剤の活用

気門封鎖剤や天敵製剤を取り入れることで、化学農薬の散布回数を減らし、薬剤感受性の低下を防止できます。

気門封鎖剤は5日程度の間隔をあけて複数回散布することで効果が高まります。

4. 雑草管理の徹底

雑草はハダニ類の発生源となるため、ほ場内外の除草を継続的に実施し、寄主植物を減らすことが重要です。

